死神とピアノ線-Days-

無一文

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
死神とピアノ線－Ｄａｙｓ－

【Ｎコード】
Ｎ２８１２Ｊ

【作者名】
無一文

【あらすじ】
培養液の中で生を受け、物心つく前から徹底した戦闘の英才教育を受けてきたブロンドの少女アリス。
善悪の判断もなくただ”親”から与えられた遊具としての死刑囚を引き裂いて来た彼女の”お遊戯”はやがて、
北大西洋を航行中の豪華客船で起きた無差別殺人事件へと発展する。
しかしこれは彼女が”死神シンシア”として請け負った最初の仕事に過ぎなかった。

（前書き）

警告：この小説には暴力・スプラッタ・グロテスクな表現が含まれています。

ーーーーＤａｙ　０ーーーー

「アリスの具合はどうだい」
無数のモニターと機材に囲まれた研究室。床を這い回る配線ケーブルの束に足を取られないよう気を配りながら、男は歩を進めた。
「そうですね～。極めて順調だと言えば良いのか、異常値ばかりだと言えばいいのか」
返事をしたのはこの機械の密林ともいうべき部屋の中央、机に山積みにされた書類の束を忙しく読み散らかしている白衣の女性だ。織物のように美しく長い金の髪を面倒くさそうにゴムで束ねて後ろへ流している。
「それは悪い意味かいクリスティ博士？」
クリスティと呼ばれた彼女は振り返って
「さぁ。でもここまで耐え切ったのはこの子が初めてですね」
メガネのツルを中指で押しあげてから数枚のカルテを取って差し出した。男がそれを手にとって記された細かい数字の羅列に目を細めていると
「四肢の切断、第？度熱傷による皮膚の壊死、無酸素による脳死、極度の加圧減圧による内臓の破裂。いずれも数分で完全再生です」
と解説を始める。
「他には……ＬＤ５０。つまり摂取した対象の半数が死にいたる毒をここ数ヵ月に渡って経口投与してますが、身体・精神共に全て正常値を維持しています」
淡々とした口調に男はカルテから目を離し、彼女の青い目を見た。クリスティはそれに肩をすくめて
「俗っぽい言い方をすれば化け物ですよ」

そう答えた。彼女なりに驚きを表現しつもりだったのだが、男はそれが気に障ったようで
「口を慎んでくれないかな博士。君が今担当しているアリスはただの被験者ではないんだ」
男はその赤い瞳をクリスティへ向けた。彼女はそれにワザとらしく溜息を吐き
「はいはい失礼しました。では奇跡と呼び変えて置きましょう」
やや鼻にかかる謝罪の口調が面白くなかったが、天才科学者に言葉のアヤを説くのもナンセンスなことだ。
そう感じた男はカルテをやや雑に机において意志表示だけし
「それで君の一番の仕事、”奇跡”の解明だけど少しは進んでいるかい？」
と本題を切り出した。
自分の研究データを乱雑に扱われてやや気を悪くしたがクリスティだったが、研究内容を聞かれてすぐに目を活き活きとさせた。
彼女は椅子に座ったままグルっと体を男に向け
「端的に申し上げますと、再生酵素テロメラーゼの異常分泌により細胞内テロメアが一切減少せず、細胞分裂が鈍化しないので……」
飛び出してきた専門用語に男はウンザリとした。例え上司や研究のスポンサーであっても彼女はお構いなしのマシンガンだ。もちろん弾は一般人には理解できない用語。
「博士。端的に、そして分かりやすく頼むよ」
そう遮った。この欠点と著しいモラルの欠如さえなければ今頃は表舞台に立ってドイツの歴史に名を刻む研究者になっていたことだろう。
クリスティはまた肩をすくめて
「失礼致しました。彼女の再生能力の秘密は……ん～、言わば驚異的な”若返り力”とでも申し上げましょうか」
「若返り？」
「ええ。体というのは消耗品で日を追うごとに傷んできます。老化

と呼ぶわけですが、傷みがひどくなって体の組織としてもう使えなくなるとその部分が破棄されます。文字通り老廃物と呼ばれるのがこれです」
　そこで区切ってからメガネをとって耳かけの部分を口端に咥えた。彼女のクセだ。
「そして破棄された部分には脳と体が働きかけ、新たな細胞、組織を再構築する。これが若返り、あるいは自己治癒です。若いうちは誰にでもある身体機能ですが、彼女の場合はこの能力が突出しているんです」
「突出？」
「ええ。生命維持に支障をきたしかねないような肉体の損傷さえも、彼女の体はそれをただの”老化現象”と認識し、瞬く間に新たな組織を再構築する訳です。要約すれば……」
　彼女はしばらく思索をめぐらすように”ん～”と鼻声をあげてから
「不老不死です。アリスは」
　そう結論付けた。男はそれに感嘆の溜息を吐いて
「まさに奇跡だね。ああ、早く完成が待ち遠しいよ」
　やや高ぶった声をあげた。
「失礼致します」
　この研究室を訪れた3人目に足音はなかった。二人が振り返るとそこにはBDU（バトルドレスユニフォーム）と呼ばれるロングコートのような黒衣に身を包んだ男が一人立っていた。
　表情は彫像のようでまさに無表情。目線も塗りつぶしたように黒いサングラスをしているせいで伺う事は出来ない。オールバックの金の髪もどことなく無機質だった。
「コマンダー。もう幻影（ファントム）は引退したんだから軍靴の音は立てていいよ」
　コマンダーと呼ばれた男はそれに僅かだけ頷き、
「アリス実戦投入はまだまだ先とのことですが訓練は来月からです。教育方針上、おおまかなロケーションだけでも伺っておきたいので

すが」
低い声でそう告げた。
「英国だよ」
男の即答に微かにだが眉間に皺がよった。
「イギリス？　冗談でしょう。私が彼女に教え込むのは日に3度の紅茶の習慣じゃない。戦闘データ収集のためにも情勢不安定な小国に傭兵部隊として……」
「紅茶か。良いなそれ」
男はクリスティに目を向けた。
「アリスには淑女としての礼儀をまず徹底的に仕込もうか」
彼女はそれにクスリと笑った。
「カーネル。私は冗談が嫌いです」
「僕は大好きだ」
カーネルと呼ばれた男はそう答えてから続けて
「もちろんドレスの着付けもそうだ。武器は……そう。ナイフだとかマシンガンだとかあまり野蛮なものは好ましくないな。もっと優雅で美しく、それでいて刺激的なものがいい」
コマンダーは呆れたように首を横に振った。
「優雅、と、言いますと？」
クリスティが細めた目を流せば
「それは分からない」
男はニっと笑う。
「僕達はただ彼女を英国淑女として愛情を込めて育てあげれば良い。そして最高傑作となった彼女自身が自ずから手にとるモノ」
部屋の一角へ手をつき
「それこそが最も相応しい武器（モノ）、そうなると思わないかい？　なぁアリス」
男の見つめる一つのモニター。そこに映し出されたのは緑の液体で満たされたカプセルに眠る、ブロンドの少女だった。

ーーーーDay　1ーーーー

「……罪状は浮浪者計２０人を暴行し死亡させたことによる傷害致死罪。懲役は２２０年。本来なら生きて外の空気も光も味わうことの無い刑期だが、もし彼女を仕留める事が出来れば約束どおり超法規的に出所させてやる」

彼、マードッグは薄暗い通路を歩きながらこの奇跡を引き寄せた自分の強運に鳥肌を立てていた。

差し出された奇跡はシンプルだった。”助かりたいなら殺せ”だ。

隣を歩く黒いロングコートの男がその奇跡について説明を続ける。

「元ボクシングのスーパーヘヴィ級のチャンピオンらしいが、拳に拘らず銃器も使って構わない。欲しいものがあれば言え。ハンドガン、ショットガン、マシンガン、何でも揃えてやる」

マードッグは噴出しそうになった。州が違えば確実に死刑になっていた囚人に重火器を与えるとこの男は言っているのだ。しかもその相手はまだ１０歳にも満たない少女だと言う。

自分に知らされた情報はごく僅かだが、この狂ったミッションの依頼主は莫大な富と絶対的な権力を持つ”お偉いさん”らしい。

金持ちの考えることは昔から分らないが、大方、無抵抗な少女が甚振られる姿に恍惚でも覚える変質者の類（タグイ）だろう。

通路最奥の扉の前、そこで自分の手錠を男が外している間にそう結論付けた。

重たい金属の扉を開けて中に入ると、ライトの刺すような光にマードックは目を細めた。無機質で何も無い、ただ広いだけの真っ白な部屋だ。

「ようこそディレク・マードック。昨晩は良く眠れたかな？」

部屋の天井、四隅につけられたスピーカーからは若い男の声が聞

こえた。
「ああ快適だった。ただ今朝に飲まされたあの丸いキャンディはなんなんだ」
今となってはどうでも良い事だが挨拶代わりだ。
……静寂。聞こえていないのだろうか。
「僕からは特に言うことはないけど欲しいものはあるかい？　Ｍ９やＰ２２６みたいなスタンダードなものからＤＥ５０ＡＥみたいな通好みのものもあるけど、どうかな」
全く関係の無い反応が帰って来た。
マードックは溜息を吐いてから
「いや。俺はこの拳が二つあれば充分だ」
ガツンと両拳を叩き合わせた。
「ＯＫ。まぁ途中で欲しくなったら遠慮なく言ってくれ。差し入れさせてもらうよ」
今度は筋の通る返事が来た。銃はあれば楽だろうが万が一、暴発したり相手に奪われでもしたら自分の身が危ない。マードックはそう考えた。
「それではターゲットの説明に入ります」
今度は女の声だ。
「ディレク・マードック３２歳、黒人男性。身長２０３ｃｍ体重１２０ｋｇ。打撃による衝撃力はＭＡＸ２６０ｋｇ。以上です」
「了解だ博士。それではアリスを部屋へ」
少女と聞いていたが姿を見るまで安心できない。マードックは手首を回しながら、恐らくは彼女が入ってくるであろう自分の向かいにある扉を睨みつけた。

しばらくの静寂の後、それは音も無く滑るように開かれた。
中に入って来たのはブロンドの髪に青い瞳を持つショートヘアーの少女。拍子抜けする程にごく普通の可憐な少女だった。ただしそ

の格好を除いて。
「紹介しよう。彼女が君の対戦相手、アリスだ」
彼女は真っ白な服に身を包み、その細い両腕は腹部で交差するようにして袖を縛られていた。知っている。これは拘束衣だ。
この予想外の格好にマードックは呆気に取られた。
「どうした試合は始まってるぞ。ゴングを鳴らした方が良いかなマードック？」
やっぱり依頼主は気が狂っている。こんな無抵抗な少女を殴り殺せと言っているのだ。悪趣味にも程がある。
全く気乗りしないがしかし、この千載一遇の、いや万に一つもないチャンスを逃すわけには行かない。
「悪いな子猫ちゃん。でも恨むなら自分の運命かあの男にしてくれ」
マードックは走りながら指を折りたたんで拳を作り、かつて世界を掴み取ったストレートを躊躇い無く少女の顔面へと叩き込んだ。
鈍い音。拳を伝わる手応え。それらは少女が絶命したことをハッキリと彼に告げた。車に刎ね飛ばされたように宙を舞う彼女は一度壁に叩きつけられ、それから湿った音を立てて床に転げた。
俯いた小さな顔からゆっくりと血溜りが広がり、床とブロンドの髪を赤く染めていく。あまりに呆気ない幕切れ。後味は最悪だ。
「満足かいボス？」
マードックは胃のムカツキを出すように息を深く吐いた。しかし男からの返事はない。当然だろうな。恍惚に浸るまもなく沈めてやったんだから。
「ネガティブペナルティを与えるぞマードック。続けろ」
耳を疑った。振り返っても少女は倒れたままだ。
「おいどういうことだボス？　約束どおり始末したじゃないか。早くここから」
「良く見るんだ元チャンプ。君の目で」
もう一度少女に目を向けると微かにだが少女は動いている。いや、これはただ痙攣しているだけだ。

「放っておいても死ぬさ致命傷だ！」
「ネガティブペナルティだイエローカード。あと一枚で豚箱へUターンだマードック」
その言葉を聞いて我に返った。つまらない気の迷いで危うくこの奇跡を逃すところだった。
マードックは虫の息の彼女に近付いて馬乗りになり
「楽にしてやるからなすぐに」
岩のような拳を振り下ろした。

「……どうしたチャンプ？　もうギブアップか？」
おかしい。何かがおかしい。マードックの拳は限界だった。そしてそれ以上に精神が壊れかけていた。
とうに息絶えたはずの眼下の少女が、とうに砕いたはずの頭蓋骨が、なぜ？　と。
もう数時間に渡って拳を振り下ろしているのにどういうことだ。もう人差し指も中指も感覚がない。
恐らく床や壁へと散った血には自分の拳から流れたものも含まれているに違いない。
恐怖とヤケクソで振り下ろし続けている拳はもうまともな形をしていなかった。
「いい加減くたばってくれ！」
振り下ろしたその一発が狙いを外れて冷たいコンクリートの床へと激突した。ピキっという骨の砕ける音、直後に激痛。マードックは悲鳴をあげて床に転げた。
部屋の中に何度も反響する絶叫。
「……ターゲットはこれが限界のようですカーネル」
女の声。
「うん。もう満足だ。ていうか飽きた。それじゃぁそろそろ解放してあげようか」

男の声。疲労しきった腕、激痛の走る拳。しかしようやくこの地獄から開放されることにマードックは心底安堵した。顔をあげると情けない涙がこぼれそうになった。

そして、少女は彼を笑顔で見下ろしていた。

目が合った瞬間にショックで瞳孔が散大する。自分の心拍音が轟音で聞こえる。

「アリス完全再生。頭部損傷による沈黙から1分12秒です。それでは次に戦闘データの回収プログラムに移行します。どうぞコマンダー」

女の声。

「ではアリス。訓練の成果を見せてくれ」

あのロングコートの男の声。そしてそれに応える様に初めて少女が笑みを見せた。天使のように愛らしい笑み。

次に耳障りな音と共に自らの拘束衣を引き裂く。彼女は白と黒の可愛らしいエプロンドレスを着ていた。有りえない。自分ですら全く身動きの取れなかったあの服を、この少女はまるで薄絹でも纏っていたかのようにあっさりと破いたのだ。

「”袋に詰めたキャンディ”の取り方。覚えてるな？」

ロングコートの男の声。今朝に飲まされた球状の固形物が脳裏を過ぎる。

「もちろんです先生」

小鳥がさえずるような少女の声。悪寒が背筋をかけあがる。

「ではやって見せてくれ」

ロングコートの男の声。

「ん？　どこへ行くんだい博士？　ショーはこれからだよ？」

男の声。

「いいえ。もうスプラッタムービーには飽き飽きして来たので。それでは一旦これで。やれやれ実験室は大掃除ね」

女の声。そしてそれがディレク・マードックが人生最後に聞いた声だった。

ーーーーDay 2ーーーー

「目潰し、金的、正中線や関節の継ぎ目などの急所を狙った打撃。もしくはそこを狙うと見せかけたフェイント。それによる筋肉の硬直、次に訪れる弛緩を確実に予測した無防備な肉体へ放つ打撃」

アメリカ合州国某州某所の地下室。薄暗い部屋の中央に設置された人型のサンドバッグに対し、コマンダーは両手を後ろで組んだままゆっくりと、しかし的確かつ柔軟な足の動きで蹴りの型をアリスへ見せている。

「これらは実戦において極めて有効なテクニックであり、我々の仕事には絶対に欠く事が出来ない要素の一つだ」

コマンダーは垂直にあげていた右足をゆるりと降ろし、アリスの方へ向き直る。

「柔道、空手、テコンドー、ボクシング、マーシャルアーツ、中国拳法。それら格闘技は人類が長い時間をかけて心血を注ぎ、いかに早くいかに的確に眼前の敵を沈黙させるかを追及し洗練し、結果得られた結晶のみを集めた芸術品だ。これらを修得した人間とそうでない人間との差は歴然となる」

コマンダーは左膝をあげ、軽く跳躍してから後ろ回しをサンドバッグに叩き込んだ。

直後に人型のそれは自身に空いた傷口から大量の砂鉄をブチ巻ける。

床へと積もっていく黒い砂山を見ている彼女に

「しかし君はその一切を学ぶ必要が無い」

今まで自分が説明してきたことを真っ向から否定した。首を傾げている彼女にコマンダーは頷き、

「今までの話してきた内容は全てある前提に基づいている。分るか

アリス？」
　彼女は首を横に振った。コマンダーはそれに微かにだけ口元を吊り上げて笑い
「それはあくまで人対人、それも自分が素手であるという前提でしか成り立たないということだ」
「先生。もっと分らなくなりました」
　アリスの無邪気な一言にコマンダーは後ろで組んでいた手を解いてアゴに当てる。
「クイズを出そうアリス。ライオンが強いのはなぜだ？」
「それは……ライオンが百獣の王だからです」
　彼はそれに大きく頷いて
「それはなぜだ？」
「え～っと……」
　口元に人差し指を当てて考え込む彼女に
「難しく考えなくていい。単純に彼らが強いからだ」
　最初の前提を彼は答えた。
「そしてその強さは格闘技などの技術によるものではない。もって生まれた力だ。ただそれのみで百獣の王たるだけの資格を得ている。その一方で」
　また手を後ろに組み
「人が血の滲むような鍛錬、工夫を重ねて技術を磨き、強さを追求する。皮肉だがそれこそが人という生き物が弱者である証なのだ。そうまでしなくては強者たりえないのだから。その上いかに頑強な肉体を築き上げても人である限りライオンの一撫での前では無力であり、立ちはだかろうとも餌以上の存在にはなれない」
　アリスは自分の前を行ったり来たりしているコマンダーをずっと目で追う。
「ライオンは王になるための技術を必要としない。それと同じ理由でアリス、君は格闘技を学ぶ必要が無い。小細工だと嘲笑する資格さえある。その上でもあえて」

ピタっとアリスの前で足を止め
「君は格闘技を学びたいのか？」
彼女をサングラス越しに覗き込んだ。アリスはそれに満面の笑みで
「はい先生！」
頷いたアリスにコマンダーはまた口端を吊り上げ
「良いだろう。では生物史上初、技術と知性を持った百獣の王になってもらおうか」
それに首を横に振ったアリス、そして彼女が愛らしい笑みで出した答え、それは
「私は王じゃなくて、お姫様になりたいです」
表情は無邪気で、しかし真剣だった。

「訓練ご苦労だったねコマンダー。それでは成績発表をよろしく」
「まず最初に申し上げますカーネル。私は徹底した現実主義者であり、こと戦闘における報告では誇張や脚色といった不純物は一切交えません」
「それは僕が一番良く知ってるよ元、幻影（ファントム）。それで、アリスはどうなんだい」
「今まで一度も埋まることのなかった地位、死神（リッパー）を彼女へ」

ーーーーＤａｙ　３ーーーー

北大西洋を航行中の豪華客船アルトリア号、船室。柔らかな絨毯の敷かれた会場ではカクテルパーティーが催されていた。
用意されたテーブルは６脚で、青いテーブルクロスの上には色とりどりのオードブル、白いテーブルクロスの上には５段のグラスタワー、そしてそこへ惜しげもなく注がれていくドンペリ。
隅ではグランドピアノ、サックス、トランペット、トロンボーン

などで構成されたスーツのビッグバンドがムーディーな曲を奏でている。
その中央、白のパーティードレスを着た美しい女性が黒スーツにハマキを加えたズングリとした男の頬を”パシ”っと平手打ちしていた。
男は足元に落ちたハマキを拾いなおして口に加え
「おーさすがドイツの淑女は手首のスナップが聞いてるな。実にスパイシーだ」
いやらしい目つきで女を見てから男は向きを変え、青いテーブルの方に千鳥足で歩いていった。
「これだからイタリア人って嫌いなのよ。あんな連中がシチリアを牛耳ってるなんて虫唾が走るわね」
汚物を見るような目で男の背中を睨みつけた。
「おいおい博士。ケツぐらい触らせてやれよ、減るもんじゃないだろ？」
振り返ると銀髪、褐色の肌と赤い瞳が印象的な青年がカクテルグラス二つを持っていた。
「ほらドンペリのプラチナ。これで機嫌直しなよ。なんといっても今日は愛娘の晴れ舞台じゃないか」
と一つを差し出した。女はそれ引っ掴んで喉に流し込み、空になったグラスを突っ返して
「すいませんね大佐（カーネル）。私あまりお酒の味は分らないので」
ドレスの裾をつまんでいそいそと会場の外、甲板へ出て行ってしまった。カーネルと呼ばれた男は首を左右に振って
「科学者の気難しさと女性の気まぐれさ。それにドイツ気質を加えたらああいう感じになるのか？　自分を実験対称にすればいいのに」
溜息を吐いてから自分のグラスをグイと空けた。
「ミスター・フリーベリ。こんばんわ」
振り返ると紫のスーツを着た東洋人が両脇に黒スーツの男を従えていた。

「こんばんわミスター・神条。随分と英語が上達したようですね？」
カーネルは屈託の無い笑顔でそう言った。
「グッドイブニングだけで見抜かれるとは流石の眼力だ。日本の大麻市場にいち早く目をつけることはありますね」
神条が目を細めるとカーネルは肩を落として
「せっかくのパーティーなんだ。仕事の話は無粋だからヤメにしないかな？」
「申し訳ないが日時場所を選ばないのが我々のスタイルなんだ。ミスター・フリーベリ」
「ん？　日本人はＰＴＯをわきまえた礼儀正しい民族だと聞いていたんだけど違ったかな？」
神条はテーブルのクラッカー手に取り、それとカーネルとを交互に見てからまた元に戻した。
「半分正解で半分間違いだ。赤穂浪士が吉良上野介の屋敷へ討ち入りしたのは深夜ですよ」
その動作にカーネルはまるで堪え切れなかったような笑みを零しながら
「ああ。君が大好きな”チューシングラ”だね。なるほどそういう忠義や礼儀もあるわけか。勉強になったよ」
そうしてカーネルが背中を向けて青いテーブルの方に歩いていった。
「日本からは手を引いたほうが良い。これは商売敵ではなく親友として申し上げる」
その言葉に足を止め
「前半は予想通りとして後半は予想外だな？」
微かに振り返る。
「園田。吉備津。その名前が絡んで来たら用心してくれ。俺が麻薬取引から手を引いたのは君の参入が理由じゃない。では」
そう言うと神条と黒スーツの男は船室の外へと出て行った。カーネルは振り返らないまま目を細め

「そのためのアリスプロジェクトなんだよ。神条サン」
グラスを一つとって中のドンペリを一息に空けた。

「紳士淑女の皆様。今宵はエドガル主催のクルージングへ御参加頂きまして有難うございます。それではこれより当パーティーの主催者、ＭＲフリーベリより御挨拶があります。どうかご着席を」
司会の男がマイクでアナウンスするとビッグバンドによる演奏が止み、拍手が沸き起こった。そしてそれに手を挙げて応えながらマイクの前に立つカーネルは笑顔を振りまき
「どうも皆さん。長口上はアクビの元と申しますので2，3分で切り上げさせて頂きます。せっかくシェフが腕を振るってくれた料理が冷めるのももったいない。といってももうテーブルの上は空ですね？」
会場の笑いを誘った。それに合わせて彼も笑いながら
「それから航行についてはご安心を。氷山の位置は全て把握してありますし救命設備も完璧です。タイタニック号のような悲劇は起こりません。ただし体重は２００ｋｇまでにして下さいよ？」
もう一度会場から笑いが起きた。
「ところで皆さん。オードブルに仕込まれていた毒や小型爆弾には気付かれましたか？」
「俺は丸呑みしちまうから分らねー」
声をあげたのは先ほどのズングリとした男だ。再び起きた笑いにカーネルは手をあげて答え
「さすがはイタリア消費者金融の重鎮。豪快なのは利率だけじゃないですね。それじゃぁまずは貴方からっと」
内ポケットから取り出した黒いリモコンのスイッチを押すと湿った音が会場に響いた。まるで真っ赤なカラーボールが命中したかのように男の中心で何かが爆ぜったのだ。
静寂の中で自らの血の海に男が身を沈めると会場にいる老若男女、

全てが全く同じ行動を取った。
”懐から銃を抜く”だ。
そしてそのズラリと向けられた銃口の先ではカーネルが肩をすくめている。
「おおさすがは裏の世界の猛者揃いだ。皆さん肝が座ってる上に冷静沈着。銃を向けても発砲しないのは僕に風穴を空けた瞬間、自分のお腹をぶち撒ける危険性を理解しているわけだ」
ニイと笑みを浮かべたまま全員を見渡した。
「だがもし、ワシの４５口径がキサマの脳漿を先に吹っ飛ばしたらどうじゃ？　それでもその爆破装置を操作出来るかな？」
呟いたシルクハットを被った初老の男はしかし、銃など構えていない。椅子にふんぞり返ってパイプを吹かしているだけだ。
「なかなか名案だと思いますよヴィルヘルム卿。しかしそれを実行しないのはなぜですかねぇ？」
ヴィルヘルムと呼ばれた男は口からリング状の煙を飛ばし
「君を殺すのは簡単なことだ。しかしフリーベリ君、ワシが口にしたのが爆弾ではなく毒の方だったら少々面白くないのでね」
挑発するように眉をあげた。それにカーネルは頷いて
「ああ。解毒方法がどうのとかの取引ですか。ならさっさと僕を撃った方が懸命です。毒は即効性なので口にしてたらとっくに」
”パン”と発砲音。硝煙をあげているのはヴィルヘルムの傍にいた女だった。そしてその銃弾はカーネルの額のど真ん中を貫く、そのはずだった。
彼の額へと拳を伸ばしているのはピアノを担当していたエプロンドレスを着たブロンドの少女。皆の視線を集めたカーネルの前に差し出された手、その握りしめた指を一つ、二つと開いていくとカランと何かが落ちた。
もちろんそれが何かは分っている。しかしそれを認める訳にはい

かない。不可能だから。しかし肉の焼ける匂いと煙は少女の手から漂って来た。
「４５口径の強装弾。ライフリングによる回転軸の見切りをやや誤りましたがダメージはほぼ最小ですお父様」
会場が絶句による静寂に包まれる中、カーネルは彼女の手を擦りながら
「ありがとうシンシア。あとでママに診てもらいなさい。お楽しみのあとでね」
そして再び彼らに赤い瞳を向け
「そうそう無線はイキてるので各国の軍隊、警察、部下モロモロ自由に連絡して下さい。当アルトリア号はどなたでも歓迎致しますよハッハッハ」

甲板の外に響いてきた悲鳴、銃声に
「おお。本当のパーティーを始めたようだねフリーベリの旦那は」
ロープを握る神条は薄暗い足元に神経を集中させながらもジョークを飛ばした。
「オードブルには手を付けず、高速艇を客船に横付けしての乗船。随分出手際が良いわね神条さん」
甲板にかけられたロープを器用に降りていく彼を見下ろしながら、クリスティは微笑んだ。
「日本人は脂っこい料理が苦手でね。スシでも用意されてたら危なかったな……」
彼もまた必死で笑みを返す。
「ふふ。それじゃ今度、カーネルにはコシヒカリで用意させて置くわ」
ドンと船に着地すると船員の一人がバランスを崩しそうになっている神条を受け止め、席へ座らせた。
「ふ～。普段からもう少し鍛えておくかな」

額の汗を拭ってから神条は甲板から見下ろしているクリスティに手をあげ
「それじゃあ御機嫌よう。シンシアちゃんに宜しく」
「ええ。それじゃぁね」
クリスティがウィンクを返すと高速艇は夜の海へと消えていった。彼女はそれを見送りながらも首を横に振って
「あなたの席には何も入ってなかったのに。もったいない」
こっそりと持って来たキャビアのクラッカーをかじった。

「ダメですねー。ほんとダメですねー」
一面が真紅に染まったかつての青い絨毯。その中央でスーツを血に染めながら尻餅をついているヴィルヘルムに向けてカーネルは嘲笑した。
「あなたの仲間、護衛、ライバル、仇敵の皆様総勢２４２名が生ハムの燻製なしにされる長い長い１０分の間いくらでもレスキュー呼ぶ時間があったんじゃないですか？」
ヴィルヘルムは口元が強張って声が出ず、震える手でリボルバーを向けるのがやっとだった。
カーネルはドイツ最大のマフィアの情けない姿に”やれやれ”と首を横に振り
「それでは一つチャンスを差し上げましょう」
ポケットから携帯電話を取り出して投げて寄越した。彼は銃を向けたまま、しかし血の海に沈んでいる携帯を取った。
「今起きたことをあなた御自慢の部下に連絡してあげて下さい。そしてそれを額面どおりに信じてくれたら救命艇を一つ差し上げますよ」
「ほ、本当か！？」
彼は食いつくように声をあげた。それに頷きながら
「ドイツ人はウソつきませんよ。最も他に選択肢でもあるならご自

由にどうぞ？」
　ヴィルヘルムは彼の気が変わらないうちにと慌てて携帯を開いて番号を打ちこむ。
「ただし……」
　手を止めてカーネルの方を見れば
「ウソはいけませんよ？　状況報告は５Ｗ１Ｈが基本です」
　カーネルは指を５本立てて
「Ｗｈｏ（だれが）……　Ｗｈａｔ（なにを）……　Ｗｈｅｎ（いつ）」
　一本づつ折っていき
「Ｗｈｅｒｅ（どこで）……　Ｗｈｙ（どうして）　ａｎｄ……」
　５本全てを折ってから再び１本だけを立てて
「Ｈｏｗ（どのように）」
　ヴィルヘルムの目を見た。その赤い瞳の奥に隠された狂気に押されるように、携帯を耳に当てる彼は頷いた。いやそうするより他はなかった。
”こちらヴィルヘルム協会本部です。どういったご用件”
「私だヴィルヘルムだ！」
”た、大変失礼致しました会長！”
「い、今から言うことを信じろこれは命令だ！　いいな！」
”か、かしこまりました”
　ヴィルヘルムは過呼吸なのか酸欠なのか分らないが目眩と吐き気がした。息を荒げながら
「エ、エプロンドレスを着た少女が、む、無差別殺人をした」
　血走った目を向けるヴィルヘルムにカーネルは黙って頷く。
「それそれは……たった今だ！　たった今！　ワシの乗っているアルトリア号で！　り、理由は分らん！！」
　カーネルは５Ｗを言い切ったという合図として懐からボートの鍵を取り出し、ヴィルヘルムに向けて左右に揺らして見せた。後は”Ｈｏｗ（どのように）”のみだ。
「そしてそれはまるで……まるで」

表現の仕様がなかった。この惨状をどう伝えれば言いのだ。見渡す限りの血、肉片、血、肉片、血、肉片、血……。
直系１０数メートルのスクリューに巻き込まれてもこうはならない。今見ている自分でさえ、見ていた自分でさえ信じられないのだ。いやむしろ見えなかった。
まるで……
「まるで死神にでも襲われたように、目に見えない鎌で切り裂かれたように次々と」
”冗談も程ほどにして下さいよ会長”
心臓が握り潰されそうなほど痛んだ。その声がカーネルに聞こえてしまったのか否か。ヴィルヘルムがそれを確認しようと顔をあげた瞬間、首が自分の足の間に転げ落ちた。
皆も”あれ”にやられた。あの見えない刃物に。あれはいったい何だったんだ。顔半分を血の海に沈めながらそんな疑問が浮かんだ。
カーネルは鮮血を溢れさせる首なし死体を見ながら
「なるほど。彼女が自ずから手に取ったのは刃物でも銃器でもなくピアノ線か。実に優雅でおしとやか、英国淑女に相応しいな」
犬歯を見せながら笑う。そしてシンシアが交差させていた腕を戻すと無数の線が弾かれるようにして彼女の右手へと絡みついた。
「これが”処刑室（エグゼキューション）”ね。子供の発想の柔軟さには恐れ入るよ」
カーネルは手についた血糊を舐め、それを絨毯へと”プ”っと吐き捨てた。
この日北大西洋の豪華客船で行われた被害者２４３名の無差別殺人は、アリスがシンシア・ザ・リッパーとして請け負った最初の仕事に過ぎなかった。

ーーーーDay　4に続くーーーー

幸福に満ちた一時（ヒトトキ）へ

「死神とピアノ線ーDays　After　Days—」

http://ncode.syosetu.com/n3097j/

（後書き）

どーも無一文です＾＾

正月早々何を投稿してるんだという感じですが
今まで書いててそれなりに形になった
”死神とピアノ線”の試作を集めて短編という格好で載せて見ました。
いかがだったでしょうか？（え）
これまで投稿してた作品と毛色が違い過ぎますね；
感想やアドバイスを頂ければ幸いです。
続きはまた、形になったものから同じような格好で投稿できればと思います。
それでは、本編で再び御会いできることを楽しみにしています。

続きというかそういうのが気になった作者大喜びの読者様は現在連載中の
「史上最強の生徒会長」
でそれっぽいサブタイのものを摘んでみて下さいませ＾＾

ではまた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2812j/

死神とピアノ線-Days-

2010年10月8日13時44分発行